

教員活動状況報告書

提出日：令和 5年2月28日

所 属：獣医学部獣医学科

氏 名：勝俣昌也 職位：教授

役 職：生産獣医学系主任

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医学部に所属し動物栄養学を専攻している教員として、獣医学科、動物応用科学科の双方で、動物栄養学関連の科目の講義と実習を担当している。また、獣医学科生産獣医学系に所属する教員として、畜産ならびに産業動物に関わる獣医学科の講義と実習を担当している。これらの講義と実習では、畜産に関わる国立試験研究機関に勤務した経験を活かし、近年の農業施策と関連した栄養管理、飼養管理についても講義している。

研究室では、ブタの栄養に関連する研究課題に所属学生と共に取り組んでいる。ブタの栄養の新展開としての「ブタの時間栄養学」、養豚現場を支える「ブタのアミノ酸要求量の推定」が、現在のおもな研究課題である。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医栄養学	獣医	必	3	約 140
獣医学概論	獣医	必	1	約 140
総合獣医学	獣医	必	6	約 140
獣医畜産管理学	獣医	選	3	約 140
産業動物臨床基礎実習	獣医	選	1	約 140
栄養化学	動物応用科学	必	2	約 140
動物飼養学	動物応用科学	選	4	約 80
栄養学実習	動物応用科学	選	4	約 20
研究室ゼミ	獣医・動物応用科学			約 20
卒論研究	獣医・動物応用科学			約 20

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

1980年代に学生時代を過ごしたわたしたちは、指示どおりに動けばなんとかゴールにたどり着ける日々を過ごした最後の世代かもしれない。しかし、社会の変化が速く、先が見とおせない今では、どこにも正解はころがっていない。だから、指示にしたがってもゴールにたどり着ける保証はない。指示が間違っていることの方が多いかもしれない。また、わたし

たちの世代にとって、効率化は金科玉条だった。余分なものはそぎ落とし、ゴールにいち早くたどり着くことが求められた。しかし、そのことの弊害にわたしたちは直面している。複雑で多様でそれがゆえに非効率的な生態系を、わたしたちの世代は効率化の名のもとに壊し続けてしまった。もっとも深刻な問題は地球温暖化だろう。わたしたちの世代は責任世代ということを実感しなければならない。

そんな難しい社会に若者を送り出す責任世代の大学教員にとって、大学教育とはいかなるものであるべきか。この問いにも正解はないが、わたしは次のように考えている。学ぶことは変わること。学生生活のまえとあとの自分の変化を、学生たちに実感してほしい。そして、学ぶことは、自由な自分に近づく第一歩。自由な自分なら、どんなに社会が変化しても、希望を失わずに生きていけるはずだ。自由に近づく喜びを、人生をとおして味わってほしい。最後に、若干技術的なことも書いておきたい。麻布大学獣医学部は「生き物」を学ぶところで、「科学」に関する素養を深める場と言ってよい。獣医学科の学生はもちろんのこと、動物応用科学科の学生も、自分が学んだ科学に関する素養を活かし、他者を支えることができる、そんな人に育ててほしい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

理念のところでも書いた「自分の変化を実感できる学び」には「大学生らしく学ぶ」ことが必要だと考えている。では「大学生らしく学ぶ」とはどのような学びかといえば、『「未知との遭遇」をとおして自分なりに考え「ほんとうのことに近づく」』がわたしの考えである。その前段として、土台としての基礎知識を講義や実習で習得する必要がある。その後の卒論研究では、まだ誰も取り組んだことのない「問い」に取り組む。この段階が「未知との遭遇」となる。研究なので、仮説どおりになるかどうかは誰にもわからない。がっかりすることもある。しかし、自分が習得した基礎知識を活かし、教員や仲間と議論しながら自分なりに考え、「ほんとうのことに近づく」経験こそが、「大学生らしい学び」であり、「自分の変化を実感できる学び」だとわたしは考えている。そしておそらく、「ほんとうのことに近づく」ために「大学生らしく学ぶ」ためには、効率的な学びは必ずしもふさわしくない。「大学生らしく学ぶ」ために、教員としてわたしが重視していることを以下に説明する。

土台となる基礎知識；わたしが担当している科目のうち、わたしがひとりで担当している獣医栄養学を念頭において説明する。獣医栄養学では獣医学教育モデル・コアカリキュラム（コアカリ）の臨床栄養学コアカリに準拠して講義の骨格を組み立てている。しかし、臨床栄養学コアカリだけでは、産業動物の栄養管理・飼養管理について講義できない。獣医栄養学は生産獣医学系の科目でもあり、産業動物について講義しなければ片手落ちになり、産業動物の栄養管理・飼養管理について講義を受けないまま学生たちは卒業していく。それではまずい。畜産に関わる国立試験研究機関に20年以上勤務したわたしの経験を活かすこと

もできない。そのような理由から、それぞれの産業動物種の栄養管理・飼養管理、さらには産業動物の生産現場がかかえる問題点などについて、基礎的なことを講義している。しかし、これだけでは教科書的な知識だけを伝えることになり、学生たちが新しい気付きを得るには十分ではない。そこで、講義内容と関連する分野の新知見や、栄養に対する動物のエレガントな反応に関わる知見などを、随時取り入れるようにしている。新型コロナウイルス感染拡大以降、オンデマンド教材の配信による講義、ハイブリット形式の講義を実施してきた。顔が見えない多くの学生たちからのフィードバックを得るため、そして、学生たちが学んだ内容を振り返ることができるよう、「今日の講義で得た新しい気付き」について毎回 200 字程度の小文を提出してもらった—この取り組みは講義が対面形式に戻った 2022 年度も継続した。臨床栄養学コアカリの内容よりも、新知見や動物のエレガントな反応に興味を示す学生が少なからずいた。臨床栄養学コアカリ、産業動物の栄養管理・飼養管理に関する講義を大切にしつつも、学生たちが新しい気付きを得る工夫をしていきたい。

学生たちに考える時間を持ってもらうために 2022 年度のレポート課題は若干の工夫を凝らした。具体的には、単胃動物の消化生理を踏まえて、ある仮説を検証するための実験計画をスライド形式にまとめてもらった。実験計画をスライド形式にまとめてもらったのは剽窃（コピー＆ペースト）を防ぐためでもあった。「自分は考えるのが好きなのでこの作業は楽しかった」とコメントしてくれる学生もいて、自分で考え自ら学ぼうという意欲が強い学生にはよい刺激になったようだ。

卒業研究 未知との遭遇；研究室に所属すると、学生たちは卒業研究に取り組む。「学ぶ」といえば必ず正解が用意されていた学生たちにとって、卒業研究は人生初めての未知との遭遇かもしれない。一方、誰も取り組んだことのない課題なだけに、見つけたことは自分だけの発見になる。わたしは学生たちと一緒にブタの栄養を研究している。栄養状態に対するブタのエレガントな反応をみつけることができれば、やっただけのことはあり、大きな喜びをもたらしてくれる。『淵野辺駅を歩いている人をつかまえて「こんなおもしろいことを見つけました！！」と言えるような発見をしよう』と学生たちには伝えている。しかし、思うようにいかないこともある。ブタはサイズが大きいだけに、物理的な制約が多く、一つの課題を完了させるのに数年かかることも珍しくない。また、複数の課題を同時に走らせることも難しい。こういう事情があるので、学生たちのアイデアで新たな研究課題を毎年設定することは、残念ながら、できない。ゆっくりでよい。じっくり取り組んでほしい。それだけに、学生たちが参加することになる研究課題の意義、目的、見通しは、（あたりまえだが）丁寧に説明するようにしている。また、ブタを対象とするのでチームで働くことが多い。面倒な仕事・作業に進んで取り組んで欲しいと、折に触れて話すようにしている。また、学生たちが自分の意見、考えを言いやすい雰囲気をつくりたいと願っている。2021 年度には「先生、こちらのやり方のほうが時間短縮できるし、うまくサンプルが採取できますよ」と学生たちから提案された。また、わたしが何もしなくても、現場での作業は学生たちが的確に受け継いでくれるようにもなってきた。蒔いた種が少しずつ育っているところだと思う。

研究室ではゼミも開催している。2020 年度までは英語のテキストの輪読と原著論文の文献紹介がゼミの 2 本柱だった。学生たちがいきなり本番に臨んでいたころは不十分な発表が多く、必ずしも有意義な時間とならなかった。そこで、本番の 1 週間前には発表資料を教員にみせて添削を受けるようにやり方を変更した。このことにより、発表者に理解が深まり、連動してゼミの参加者の理解も深まったようだ。しかし、ゼミでの質疑応答はなかなか盛り上がりがない。そこで、読書会型の教科書「動物の栄養」の輪読を企画した。あらかじめ教員を含めて全員が教科書を読んでもくる。ゼミ当日はわたしが司会進行役となり、記述や図表に関する説明を求める。どこをだれがあげられるかはその場にならないとわからない。したがって全員がその日の部分を読んでもくる。どういう説明を求めるかを予告しておけば、学生は記述の内容を咀嚼してくる。当初はわたしも学生も不慣れでなかなか思い通りにいかなかった。未知の専門用語もそのまま素通りしていたが、その用語の意味はわかっているの？と質問することで、少し深入りして調べてくる学生もちらほらと出てくるようになった。そうはいっても、学生たちの態度はまだ「こなす」という域を出ていない。学生たちが過度に緊張することなく、「学ぶ」楽しさを感じることが出来る時間にしたい。文献紹介のほうは文献の全文を（おそらく）翻訳ソフトを使って和訳した資料を作成し、その資料を読む（朗読に近い）ことがほとんどだった。担当した学生たちは「こなす」ことに精いっぱい、文献の内容を自分のものにできているのか疑わしかった。担当する学生がそういう状態では、話を聞く学生が文献の内容に興味を持ち、かつ、理解できているようには思えなかった。そこで、2 週間に 1 回の頻度で勝俣と文献ゼミをやっている獣医学研究科の後期博士課程の大学院生を研究室ゼミに招いて、文献紹介のお手本を見せてもらった。この大学院生は文献の内容を自分で咀嚼して自分の言葉でまとめるという方法をとっている。この方法で文献紹介することを学生たちに伝えた。担当する学生にも聞く学生にもよい時間になることを期待している。

最後に、自分の発見を他人に伝えることも経験してほしい。関東畜産学会は、指導教員が学会員なら、学生は会員にならなくても学会発表できる。このシステムを利用して 2019 年度、2020 年度、2021 年度と 3 年連続して学生が発表し、優秀発表賞もいただいている。2022 年度は本学で開催した第 16 回日本アミノ酸学会学術大会で対面のポスター発表を経験してもらった。この取り組みは今後も続けていきたい。

アクティブラーニングについての取組

現状とくに取り組んでいない。

ICT の教育への活用

新型コロナウイルス感染症拡大以前は授業の教材スライドを PDF 化したものを学理を介して配布した。2020 と 2021 年度は必要に駆られたこともあり、学理を介して小テストやレポートの提出も実施した

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

① 教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

B 3. の教育の方法で書いたように、教科書的な知識を伝えるだけでなく、講義内容と関連する分野の新知見や栄養に対する動物のエレガントな反応に関わる知見などを随時取り入れて、学生の興味を持続させるように試みている。2022 年度は対面での講義となったので学生の反応を教室で確認できるものの、それだけでは十分ではない。「今回の講義での新しい気づきについて」という 200 字程度の小文を毎回提出してもらっており、そちらでも学生の反応は確認できるので、この取り組みは今後も継続する。

② 学生の理解度の把握（A～C）

B ①でも書いたように、「今回の講義での新しい気づきについて」という 200 字程度の小文を毎回提出してもらっており、学生の理解度や興味関心について把握することに努めている。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

B 参考図書をあげ「予習することが望ましい」とシラバスには書いている。1 週間前には講義資料を LMS にアップロードしている。しかし、予習を促すに至っていない。「今回の講義での新しい気づきについて」を書くにあたり学生は講義内容を反芻ことになるはずで、最低限の復習には結びついているのではないかと。

④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A～C）

A 対面授業で質問があったときは、その場で回答できるものはその場で回答する。持って帰って調べる必要があるときは、翌週の講義の時に「このような質問がありましたが、調べたところ、こういう回答になります」と全員に説明するようにしている。メールで質問があったときも上記と同様の対応をしている。

④ 双方向授業への工夫（A～C）

B 学生たちが提出してくれた「新しい気づき」に対してコメントを返すようにしている。

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

6V の総合獣医学の「栄養学」の授業を担当している。国家試験の過去問題で「栄養学」に関連する問題を解説することになっている。2022 年度は国家試験対策チームのメンバーとして国家試験に向けて補講を受ける 6 年生のサポートにあたった。

5. 学生授業評価 (分量の目安：4～7行 (160字～280字))

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

配布資料の文字が小さすぎるという指摘をもらったことがあった。見えやすいように翌週から対応した。

② ①の結果はどうでしたか。

配布資料の件は、その後指摘が続かなかったので、解決したと考えている。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

2023年度も学生の指摘要望には速やかにかつ的確に対応する。2022年度の学生授業評価では「声が小さい」「講義の進行が速い」というコメントが散見された。「声が小さい」については教室のワイアレスマイクの調子が悪かったことも関係していると考えている。今後は有線マイクを使うようにする。学生は講義資料に穴埋めしながら講義を聞くが穴埋めに必要な時間を十分とるように心がける。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

成績向上の意味するところが「不合格となる学生数を減らす」であれば、成績の総合評価に占める定期試験の割合を現状の70%から50%に下げようと考えている。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

学生の成果：関東畜産学会優秀発表賞の受賞 (2019年、2020年、2021年度)

学生からの評価：授業評価ならびに直接メールなどで寄せられた要望。

7. 指導力向上のための取組 (FD研究会参加状況)

出張等と重ならない限りFD研究会には参加している。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

① 学生が自分の変化を実感できることを目指す。講義実習では学生の新しい気づきを大切にする。具体的には、学生の新しい気づきに対するコメントを、可能な限り翌週の講義までに返すようにする。

② 研究室活動では「ほんとうのことに近づく」喜びを学生たちが実感できるよう、新しい発見に向けてともに励みたい。データを取得するところまでは学生たちができるようになってきた。次のステップとして、データの意味を自分で考えることができるよう、独習する習慣を学生たちには身につけてもらいたい。さしあたり、ゼミの当番以外で文献検索から論

文を読む習慣をつけてもらいたい。その一助として、ブタの栄養と一緒に研究している学生たちには読んでほしい文献を定期的に送るようにする。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

授業に関するもの；シラバス、小テスト、レポート課題、試験問題、スライド資料、配布資料

教育改善に関するもの；（わたしは記録を保管していないが）FD研究会への参加記録

他者から提供されるもの；学生の授業評価、学生からのメール

教育/学習の成果；関東畜産学会優秀発表賞の受賞（2019、2020、2021年度）、学生が作成した研究室ゼミのレジュメ